



自然遊学館 だより



2008 WINTER

No. 46



■2008.1.16 発行 貝塚市立自然遊学館

■行事レポート

箱谷ハイキング	1
化石採集	3
館長と自然探訪「切り絵制作Ⅱ」	4
「トンボの池」10周年記念祭	5
農業庭園「たわわ」池さらえ	6
源流探検	7

■生きものよみもの

カマキリタマゴカツオブシムシ の生活史 5	8
サツマヒメカマキリが 10個の卵をうみました!	10
【泉州生きもの歳時記】 ネズミノテ!?	12

■館長コーナー

冬3. それって本当?	13
-------------	----

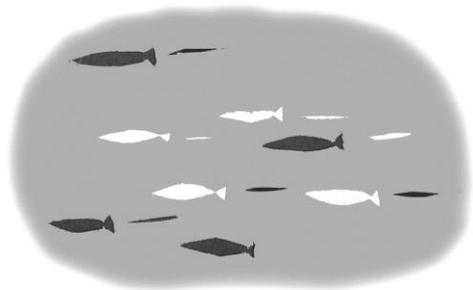
■投稿

ウチダザリガニを捕まえる (寺田拓真)	14
---------------------	----

■寄贈標本の紹介

遊学館スタッフ日誌	16
-----------	----

■おしらせ



表紙の魚のイラストは二色小学校4年生(当時) 田中貴大さんが2007年3月に作成した切り絵作品を基にしています。



■行事レポート

箱谷ハイキング

場所：蕎原箱谷

日時：2007年10月14日(日)10:00～14:30

参加者 28人

暑く長い夏も終わり、ようやく秋、という気持ちのいい日でした。今回、キノコがご専門の上谷利明さんに講師をお願いしました。

牛滝山貝塚線沿いの駐車場から出発し、蕎原町会館横の神社をぬけ、近木川沿いの田畑近くに下ります。その後、箱谷川へむけて林道を進み、箱谷川沿いで昼食。午後からは野井谷池方面で観察会をする、というのが、今回のコースです。

出発後すぐ、シイやアラカシの残る薄暗い大神宮・常福寺境内で、コフキサルノコシカケを見つけました。

道路を横切って田んぼに下りると、側溝でマムシの幼蛇が死んでいて、ゆっくり模様を観察することができました。オクラ収穫後の畑にガが飛び交い、残り葉を幼虫が食べていましたので、帰館後保田先生にお聞きすると、あおい科を食べるワタノメイガだろうということでした。

稲刈り後の水田に、オモダカがまだ花をつけていますが、土手のカラスウリは真っ赤に色づき、種子の形が大黒様に似ていることを話して取り出しました。「アキノノゲシに赤いアブラムシがついていたら、採集してきてください」と昆虫担当者に頼まれていたので、手分けして探しているうちに、側溝に溜まった泥にアライグマのはっきり

した足跡を見つけました。上谷先生からウラボニガサの仲間、カラカサタケの仲間、ホコリタケを教えてもらい、ホコリタケは潰して胞子を噴出させて遊びました。

箱谷に入ると朽ち木や地面に積もった腐葉土にキノコが次々見つかり(いつもの行事と違って、見つけたら名前を教えてもらえるので)、さらに競ってキノコ探しです。クヌギタケやオオチャワンダケが印象に残りました。途中ヒバカリの死体を拾いました。

午後、野井谷池で水生昆虫採集や植物観察をして帰途についたとき、鮮やかな色のヘビを見つけましたが谷の方へ逃げてしまいました。山田さんがもう一度探しに行って捕らえ、駐車場で参加者に見てもらいました。ヤマカガシの幼蛇では?ということになり、咬まれたら大変と大騒ぎしながら撮影し、逃がしてやりましたが、館に帰って調べるとジムグリと分かり、採集すればよかったと悔やむことしきりでした。



ジムグリ幼蛇

＜確認された植物＞

＜きく科＞ヨメナ、ノコンギク、ヨモギ、*アメリカセンダングサ、*コセンダングサ、*セイタカアワダチソウ、アキノノゲシ、ノゲシ、タカサブロウ、*ハキダメギク、ヤクシソウ、ヒヨドリバナ、シュウブソウ、ヤブタバコ、コウヤボウキくうり科＞カラスウリ、スズメウリくきつねのまご科＞キツネノマゴくごまのはぐさ科＞アゼナ、*アメリカアゼナくなす科＞イヌホオズキくしそ科＞アキノタムラソウ、レモンエゴマくきょうちくとう科＞テイカカヅラくかきのき科＞カキくあかばな科＞チョウジタデくみそはぎ科＞*ホソバヒメミソハギ、ヒメミソハギくふうろそう科＞ゲンノショウコくまめ科＞ヤブマメ、クズ、タンキリマメ、ヌスビトハギ、ノササゲくばら科＞クサイチゴ、ダイコンソウ、フユイチゴ、キンミズヒキくあぶらな科＞クレソンくあけび科＞アケビくしきみ科＞シキミくひゆ科＞*ホナガイヌビユ、ヒナタイノコズチくたで科＞イヌタデ、ハナタデ、ミズヒキ、ミゾソバ、アキノウナギツカミ、ママコノシリヌグイくいらくさ科＞カラムシ、アオミズくくわ科＞クワクサくやまのいも科＞ヤマノイモくゆり科＞サルトリイバラ、ホトトギス、ギボウシ、ノギランくかやつりぐさ科＞ナキリスゲ、ハリイくやし科＞シュロくいね科＞*オオクサキビ、カゼクサ、ノガリヤス、ネズミガヤ、ヌカキビ、チヂミザサ、チカラシバ、コブナグサ、ススキ、くおもだか科＞オモダカくひるむしろ科＞フトヒルムシロくみくり科＞ナガエミクリ

＜確認された動物＞

爬虫類 ジムグリ、ニホンマムシ (死体)、ヒバカリ (死体)、シマヘビ (脱皮殻)
両生類 ニホンイモリ、ツチガエル、トノサマガエル、ニホンアマガエル、ウシガエル
魚類 カワムツ、ヨシノボリ類、ゲンゴロウブナ

甲殻類 サワガニ、ミナミヌマエビ、ヨコエビ類
貝類 マシジミ、カワニナ、サカマキガイ、ウスベニマイマイ
水生昆虫 マダラカゲロウ、カワトンボ、モノサシトンボ、コシボソヤンマ、クロスジギンヤンマ、オニヤンマ、オジロサナエ、マツモムシ、ミズスマシ、コカクツツトビケラ属
陸生昆虫 ハラオカメコオロギ、ツユムシ類、オンブバッタ、ショウリョウバッタ、ツツレサセコオロギ、ハラビロカマキリ、ツチカメムシの一種、センチコガネ、タマムシ、ガガンボ類



＜確認されたキノコ＞ (同定：上谷利明)

キシメジ科 アカキツネガサ、サカズキホウライタケ、チシオタケ、ヒメキシメジ、モリノカレバタケ sp
ウラベニガサ科 ウラベニガサ
ハラタケ科 ザラエノハタラケ カラカサタケ sp
モエギタケ科 ニガクリタケ、モエギタケ sp
フウセンタケ科 ミドリシギタケ
サルノコシカケ科 オシロイタケ、カワラタケ、シハイタケ、ヒイロタケ、マスタケ
マンネンタケ科 コフキサルノコシカケ
タバコウロコタケ科 ネンドタケモドキ

ヒメツチグリ科 エリマキツチグリ
ホコリタケ科 ホコリタケ、ノウタケ
スッポントケ科 スッポントケ
ズキンタケ科 ビョウタケ
チャワントケ科 オオチャワントケ
クロサイワイタケ科 マメザヤタケ

(白木 江都子・湯浅 幸子)



化石採集

場所：蕎原箱谷

日時：2007年10月21日(日) 10:30～14:30

参加者 46人

例年、化石採集会は参加希望者が殺到する人気行事です。今回も200人をこす方々の応募の中から抽選で選ばれた幸運な41人の方々が、化石発掘を行う機会を得ました。

和泉層群の露出する蕎原箱谷の採集会場では、はじめて化石採集を行う方も多量中、講師の高田雅彦さんや加藤守さん(蕎原箱谷古生物研究会)の解説の下、採集に没頭している様子でした。

今回産出された化石について、以下にまとめました。

・二枚貝類

アシラの1種 *Acira* sp.

ろく
肋模様のきれいな2個体が見つかりました。

ナノナビス類 *Nanonavis* sp.

幼貝から成貝まで多数。立派な大型合殻の個体を採集された方もいました。



大きなナノナビスを見つけた亀口拓海さん 10才

エリフィラの1種 *Eriphyla* sp.

1個体採集された人がいました。

・巻貝類

5mm程度の小型の巻き貝(属種不明)

ルーペで貝化石の密集したところを観察するとよく見つかります。

・甲殻類

スナモグリの1種 *Callianassa* sp.

多数のノジュールを割ったところ^{はさみあし}鋏脚が7個ほど見つかりました。大きいハサミの化石が1個、残りは小さいハサミの化石でした。なお、ハサミ以外の化石は見つかりませんでした。

・脊椎動物

軟骨魚類（サメ類）のものと思われる脊椎骨 1 個が発見されました。あまり見つからないレアな化石の一つです。



サメの脊椎骨を見つけた前川哲平さん 7才

・植物

陸上植物とおもわれる材化石や葉が炭状になって多数見つかりました。そのうち材化石は地層の圧力をうけてぺっしゃんこになっていました。

・生痕化石

サンドパイプ Sandpipe

海底に穴を掘って生活していた生き物の住まいの跡が化石になったもので、この産地ではよく見つかりました。

甲殻類の糞粒？とされているもの Faecal pellet？ノジュール中に直径約1mmの黒い棒状の集合体を採集された方がおられました。

また、化石ではありませんが、泥岩の隙間から鉱物を採集された方もおられました。

方解石 Calcite

黄鉄鉱 Pyrite

その他の炭酸塩鉱物などルーペで美しい結晶が観察できます。

今回の化石観察会ではアンモナイトは留守だったようですが、レアな「サメ類と思われる脊椎骨の化石」が見つかりびっくりしました。

さて、次回はどんな化石の発見が待っているのでしょうか。楽しみです。

(高田 雅彦・山田 浩二)

館長と自然探訪「切り絵作制Ⅱ」

場所：自然遊学館多目的室

日時：2007年10月28日（日）13:30～16:00

参加者 14人

切り絵が初めての方ばかりが集まりました。初めてなので原画は私のほうでコピーを提供しました。車えびに4人、イシダイに2人、シャコ・カメ・カニ・鳥の羽根にそれぞれ1人ずつ挑戦です。コピーとケント紙を重ねたものを同時に切りますから、力と根気が求められます。みんな真剣です。切り絵製作を通して生き物の姿に迫っていただくことを目的に取り組んでもらいまし

た。結果、ほぼ原画と同じように素晴らしい作品が出来ました。最後に合評会をもって終了しました。



(川村 甚吉)

「トンボの池」10周年記念祭

主催：自然遊学館わくわくクラブ

共催：自然遊学館

場所：市民の森内自然生態園

日時：11月10日（土）10:00～11:30

参加者：65人

記念祭の準備は、前月の定例作業日10月13日から始まりました。トンボの小橋付け替えや、池や山に打ち込む杭を調達するために、山口進自然遊学館わくわくクラブ会長の持ち山へ行かせていただき、間伐材の切り出しと木の皮剥きをしました。山に行かずトンボの池の掃除をするグループは、草抜きや茂りすぎたヨシ、アンペライを刈り取りました。参加者：17人

10月20日、山口会長と会長が一番弟子北川敏喜さんの指導で、トンボの小橋の付け替えと掲示板の新築をしました。参加者：

13人

10月27日、トンボの池では小橋の材磨き、杭打ち替え、小池のヨシ抜き、掲示板の支柱磨きとアクリル板取り付けを、海辺の植物ブロックでは、ダンチクやハマゴウを剪定しました。参加者：15人

11月7日と9日、各種案内板づくりと餅米洗いをし、準備漏れの無いよう最終チェックをしました。参加者：8人。

11月10日、予報は雨や曇りでしたが、暑いほどのいいお天気に恵まれました。自然遊学館わくわくクラブ員はトンボベストやトンボ市民サミット貝塚大会時につくったトンボTシャツを着て9時に集合、来賓の席を設置するなどの会場の設営と、付け替えたトンボの小橋や新築の掲示板を紅い布で覆いました。杵でつくお餅の準備と並行して、午前中に帰られる来賓や参加者の方々のお土産用お餅を、電気餅つき機で作り始めてもらいました。

10:00 挨拶 山口進(自然遊学館わくわくクラブ会長)

保田淑郎(大阪府立大学名誉教授)

祝辞 吉道勇(貝塚市長)

トンボの小橋渡り初め

案内：日高向日葵・酒井陽子・酒井智子

トンボの池掲示板お披露目

案内：喜多優香・江本大地

クヌギ(ドングリの山で芽生えた) 記念植樹

吉道市長・藤原副市長

山口会長・保田教授

10:30 イノシシ剥製お披露目(館内ジゴマ)

案内：高野夏子・日高菜の花

準備：高野晴一郎

ドングリの山を背景に記念撮影

自然生態園案内

案内：わくわくクラブ員

11:30 閉会の辞(川村甚吉自然遊学館長)



式典終了後、10年前にトンボの池をつくるときに参加した人、第11回トンボ市民サミット貝塚大会に関わった人、現在池の維持管理に参加している人などが残って、にぎやかにお餅をつき、十分味わって後に、お隣の関空交流館 2F セミナールームをお借りしました。自然遊学館わくわくクラブ員が最近のトンボの池状況を発表し、中には家族ぐるみの劇や紙芝居による発表もあって、笑いの絶えないなごやかなひとときでした。

(白木 江都子)

農業庭園「たわわ」池さらえ

場所：馬場（農業庭園たわわ）

日時：11月23日（金）10:00～15:00

参加者：21人

「トンボの池」の池さらえ経験を生かし、貝塚市馬場のたわわ農事組合にお願いして、農業庭園「たわわ」の池さらえをさせても

らうようになって4年目です。

雨の少ない泉州地域には池が多く、かつて池は、毎年樋を抜いて池さらえをしていました。村の人たちは魚やエビなどを捕らえて分け合い、底の泥を農作物の肥料にし、池底は空気に触れて酸素の供給を受け、太陽の恵みも受けていました。

今年、たわわ農事組合の方々は、三年越しの私たちの努力に応えようと、あらかじめ重機を使って土手の外側の草や土を除き、樋の石積みが見えるようにしてくださっていました。例年通りポンプで水を抜きながら、池の外側では「樋尻」の石を外して竹や棒で突き、遂には樋が本来の役割を果たし、池の水が流れ出しました。しばらくすると石や泥が詰まったのか流れ難くなったのですが、池の水はほぼ無くなり、もう一息だと声を掛け合って泥上げを続けました。すくい上げた泥はバケツに入れて、池の横のクリ幼樹まわりに置きましたが、これが重くて大変な作業でした。やがて、去年の作業終了時に目にした「馬の頭（樋柱を受け止める材の端）」が出現し歓声があがりました。池の周りに50年前の人々が立っているような気がしてなりませんでした。



バケツリレーで泥をすくう

＜たわわの小池で観察した生物＞

- 魚類 ドジョウ
- 甲殻類 スジエビ、アメリカザリガニ、サワガニ
- 貝類 ハブタエモノアラガイ
- 昆虫 シオカラトンボ幼虫、フタバカゲロウ、
マメゲンゴロウ、ハイイロゲンゴロウ、
ヒメガムシ、チビミズムシ、マツモムシ、
コマツモムシ、アメンボ、アオイトトン
ボ、アカネ類



昼食後、トチグラ谷を登る

(白木 江都子)

源流探検

場所：近木川源流

日時：2007年12月1日(土) 10:30～15:30

参加者 19人

蕎原バス停に集合した参加者は、近木川の源流を目指し、川沿いに続く道を出発しました。標高約300mの地点にある休場橋へたどり着いたところで、まずは一休みです。この付近は今年になって再びアマゴの泳ぐ姿が確認されている溪流です。まだまだ足取りも軽く、ちょうど見頃を迎えた紅葉(今年はかなり遅い)を楽しみながら、さらに上流へと登って行きました。途中、和泉葛城山の登山道 A コースの分岐点と分かれ、落葉の積もる本谷林道をひたすら真っすぐ進んでいきました。道沿いでは、ところどころホコリタケが見つかり、子どもたちは触ると孢子が煙のように出るのを楽しんでいました。

登りの連続にだんだんと参加者の子どもたちから「しんどーい、おなか減ったー」

の音が聞こえてきだした頃でした。「川の向こうの大きな石の横にリスみたいなのがいる！」と参加者のお父さんが声を上げました。指を差した方向に目をやると、テンほどの大きさで、茶色く尻尾の長い哺乳類がきょろきょろと動いていましたが、そのうち姿をくらましてしまいました。写真撮影もする暇もなく、結局、何だったのかわからずじまいです。

ようやく、お昼ご飯。このあたりは標高約500mの地点で、じっとしていれば寒さが堪えますが、川村館長が先回りして熱々の豚汁をこしらえてくれていました。全員であり難く頂き、パワーが回復したところで、いよいよトチグラ谷の斜面を登って行きました。この辺りまで来ると流れはか細く、源流が近いことを感じさせます。

しばらくすると、川沿いの道は舗装がない土の道になり、さらにはこの道もなくなりました。眼前には谷筋を流れる細い沢だけになり、這うようにして急斜面の沢登りになりました。倒木をまたいだり、くぐったりの難所とスリルの連続でしたが、なんとか全員無事に標高約650mの源流地点ま

でたどり着くことができました。その場に源流到達記念碑として、参加者一人ひとりに名前を書いてもらった杭を立てました。



近木川（トチグラ谷）の源流地点

苦劳しましたが、近木川の源流を自分の目で見たんだという充実感を胸に、帰りも滑って転ばないように注意して下りました。そして、出発地までの道のりをまた延々と徒歩で戻り、解散しました。翌日（翌々日？）、親御さんらは筋肉痛に悩まされたかもしれませんが...

(山田 浩二)

■生きものよみもの

カマキリタマゴカツオブシムシ の生活史 5

本種の生活史について、私たちが研究を始める前に分かっていたことは、幼虫で冬を越し、成虫が春と秋に見られるということだけでした。

春にカマキリの卵囊から出てくるカツオブシムシの成虫は越冬世代です。これが1年のうちで目にする確率が一番高いステージでしょう。これらが交尾した後、カマキリのふ化後卵囊に産卵し、孵った第1世代の幼虫は、夏の間に卵囊殻を摂食して発育し、秋に成虫（第1世代）になることが分かりました。



図7. カマキリタマゴカツオブシムシ越冬世代成虫
(卵囊はオオカマキリ)

「ふ化後卵囊を食べて夏を過ごす」ことが分かり、本種の生活史についてはほぼ明らかにできたと思いますが、まだまだ分からないことも残されています。

秋に現れた第1世代の成虫をハチミツ水溶液で飼育すると、冬を越して生き延び、

翌夏に産卵することが確かめられました(岩崎ら、1998)。野外では餌がないので死んでしまうのですが、成虫越冬できる能力を「潜在的に」持っていることが確かめられました。

また、和泉市の緑ヶ丘では、オオカマキリとチョウセンカマキリのふ化後卵囊から、秋に、同属のクロヒゲブトカツオブシムシ *Thaumaglossa hilleri* が脱出したことがあります(1993年と1994年の調査)。1つのふ化後卵囊から2種の成虫が脱出することもあり、この2種は競争関係にあります(岩崎ら、2000)。しかしながら、クロヒゲブトカツオブシムシは、南大阪でのこれまでの調査では、春にカマキリの越冬卵囊から出てきたことはありません。これも、なぜだか分からないことです。

前々号で述べたカツオブシムシに寄生するカマキリカツオアリガタバチは、夏のふ化後卵囊に入っている第1世代幼虫から脱

出することが多く、越冬卵囊に入っている越冬世代幼虫からは、ほとんど脱出しません。越冬世代にも寄生するのなら、もっと早く誰かによって発見されていたものと思われます。このアリガタバチの生活史にも、解決すべき点が多く残されています。

これまで述べてきた第1世代の卵囊寄生率(8割程度)と脱出個体数(平均で6~7個体)は、初夏に採集したふ化後卵囊を、直射日光を避けた条件で飼育した場合のもので、大阪府立大学の圃場での観察では、日中いっぱい日光が当たり続ける茎に産まれたふ化後卵囊では、第1世代幼虫が夏のある時期に、すべての個体が脱出してどこかに行ってしまうことが分かりました。日陰にある卵囊では、そのようなことは起こりません。出ていった幼虫は、別のふ化後卵囊を見つけるのかもしれませんが、はい回って探す分には、そうそう見つかるものではないと思われます。

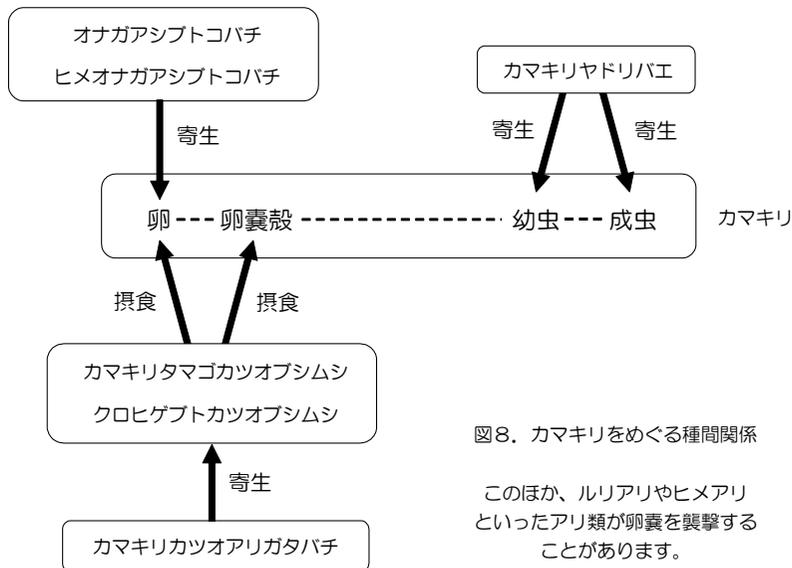


図8. カマキリをめぐる種間関係

このほか、ルリアリやヒメアリといったアリ類が卵囊を襲撃することがあります。

野外では、本種の第 1 世代成虫が秋に脱出する卵囊の割合と個体数は、幼虫の移出、アリガタバチによる寄生、他のカツオブシムシとの競争、ルリアリやヒメアリなどのアリ類による襲撃などによって、先に示した値より低くなるものと考えられます。

オオカマキリもチョウセンカマキリも、あるいは他のカマキリも、大阪では年 1 化の生活史を送ります。それに対して、カマキリタマゴカツオブシムシは年 2 化で、さらに第 41 号で紹介した卵寄生蜂のオナガアシブトコバチ、および幼虫と成虫に寄生するカマキリヤドリバエ *Exorista bisetosa* (岩崎, 1993) も年 2 化か、それ以上の生活史を送ります (図 8 にカマキリの寄生者をまとめました)。

寄主は年 1 化なのに、それらの寄生者は年多化の生活史を送るという共通点を持っています。このことも、あらためて「なぜ？」と尋ねられれば、答えに困ってしまいます。自然を相手にするとき、完全な答えを得ることは中々むずかしいことです。

今回で連載は終了します。第 42 号から第 46 号まで、長々とお付き合い下さり有難うございました。

引用文献

岩崎 拓 (1993) インセクタリウム 30 : 260-265.
 岩崎 拓・青柳正人・百々康行・石井 実 (1998) 応動昆 42 : 170-171.
 岩崎 拓・青柳正人・百々康行・石井 実 (2000) 昆虫ニューシリーズ 3 (3) : 105-109.

(岩崎 拓・青柳正人)

サツマヒメカマキリが 10 個のたまごをうみました！

タイトルは、本誌第 42 号の江本大地・玲子さんの投稿 (みどりいろのコカマキリが 7 個のたまごをうみました!) を真似てみました。

2006 年 9 月 12 日に貝塚市千石荘で採集したサツマヒメカマキリの幼虫を飼育した結果を報告します (表 1)。飼育は準自然条件下で行い、野外で採集した小昆虫を餌として与えました。カマキリ幼虫は冬の間も与えられた餌を摂食しました。

表 1. サツマヒメカマキリのメス成虫の飼育記録

年	日付	観察事項	間隔
2006年	9月12日	採集、脱皮	
2007年	3月28日	脱皮 (終齢幼虫へ)	
	4月23日	羽化	
	5月21日	産卵 (1卵囊)	
	6月 1日	産卵 (1卵囊)	11日
	6月 8日	産卵 (1卵囊)	7日
	6月22日	産卵 (1卵囊)	14日
	7月21日	産卵 (2卵囊)*	29日
	8月14日	産卵 (1卵囊)	24日
	9月 3日	産卵 (1卵囊)**	20日
	9月11日	産卵 (1卵囊)**	8日
	10月10日	産卵 (1卵囊)	29日
	10月30日	死亡	

* 連続して2卵囊を産む (図1)。

** 卵囊のサイズが通常の半分程度。

途中、7月21日には一度に2卵囊を産みました (図1)。10月までに合計10個の卵囊を産み、成虫期間は190日でした。採集してから1年以上飼育していたことになり

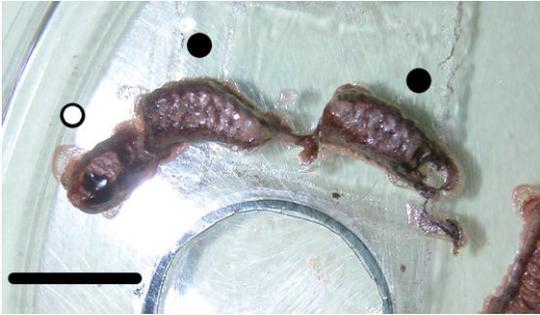


図1. ツツミヒメカマキリの連続卵囊（黒丸）
白丸は6月22日に産まれた卵囊。左下のスケール（黒線）は1cmを示しています。

同属のヒメカマキリは卵で冬を越し、春にふ化、夏に幼虫が発育して、秋に成虫になるという、大阪での他のカマキリと同じ生活史を送ります。それに対して、ツツミヒメカマキリは、幼虫で冬を越し、春に成虫になり繁殖するという生活史を送ります（後藤、2000）。

今回の飼育結果からは、春に羽化したツツミヒメカマキリが秋まで生きて、ヒメカマキリの成虫に出会う可能性があることが示唆されました。残念ながら、秋にヒメカマキリのオス成虫を採集することが出来なくて、交尾を試す機会はありませんでした。

以下に、自然遊学館所蔵のヒメカマキリ属2種のメス成虫の前胸背板の計測値を示しました（ツツミヒメカマキリ3個体とヒメカマキリ2個体：図2、表2）。本誌第39号（2006年春号）で示した通り、今回の飼育個体も前胸背板が長く、くびれ方がきつという結果が得られました。

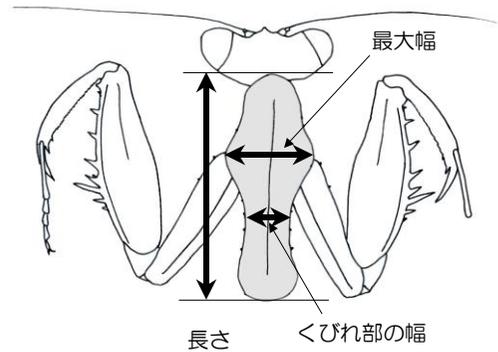


図2. 前胸背板の計測値

表2. 貝塚市内で採集されたヒメカマキリ属2種のメス成虫の前胸背板の計測値

種	採集場所	採集者	採集日	長さ (mm)	くびれ の比率
ツツミヒメカマキリ					
	水間大橋	清水 千尋	2004. 6. 1	9.0	1.95
	千石荘	岩崎 拓	2006. 6.24	8.9	1.97
	千石荘	岩崎 拓	2006. 9.12 ¹⁾	8.8	1.99
ヒメカマキリ					
	蕎原井之坂橋	岩崎 拓	2004.11. 4	8.0	1.76
	蕎原箱谷	山田 浩二	2005.10. 2	7.9	1.73

1) 幼虫を採集して飼育(本文参照)。

2) 最大幅/くびれ部の幅。

参考文献

後藤 伸 (2000) 「虫たちの熊野 照葉樹林にすむ昆虫たち」、紀伊民報社。

(岩崎 拓)

【泉州生きもの歳時記】

ネズミノテ！？ 鼠の手

今年の干支は子年ということで、館内で飼育展示しているアカネズミ、ヒメネズミたちは前にも増してスポットライトを浴びることになりそうですが、その他にネズミにちなんだ名の展示物はないかなと改めて見回すと、展示ホールに入ってすぐのところにネズミノテがあります。「ネズミの手」って～？と、想像たくましい方は背中がゾッ～とするかもしれませんが、何もおぞましいものではありません。ネズミノテというのは、二枚貝のカキの仲間（カキ目ネズミノテ科）です。貝殻の大きさが 1.5cm 程の小型種で、「ネズミの手」と言われるとそんな感じのする形です。二色浜の移入砂の中で見つかる多数の貝を紹介している展示コーナーの標本の 1 つですから、探すのは少し大変かもしれませんが...

ちなみに移入砂というのは、二色浜の砂浜が年月とともに波で砂が奪われて痩せていくので、瀬戸内海などのよその地から運んで来て補充した海砂のことをいいます。ですから、移入砂の中で見つかるネズミノテは、もともと二色浜では生息していない貝なのです。そして、同じ仲間に少し大きいですが形のよく似た、その名もモグラノテという貝もあります。泉南市のサザンビーチや岬町のせんなん里海公園の砂浜でも同様に砂の補充が行われているので、この両種が拾えます。貝拾いの観察会などで、「ネズミ？いやモグラか？」とつぶやきながら貝を拾う様は、初めて観察会に参加す



二色浜の移入砂の貝の展示コーナー

る人たちにとっては奇異に映ることでしょう。

また、同じ二色浜の移入砂の貝を展示しているコーナーでは、ハツカネズミガイという具体的なネズミの種名を冠した 5mm 程の小さな巻貝も展示してあります。小さなハツカネズミをイメージして名づけられたようです。この貝はシロネズミガイ科に属し、仲間にはマルシロネズミやクビレシロネズミなどいろいろなネズミと名のつく貝があります。

いったいどんな貝なのか気になってきた方は、実物をご覧にお越しく下さい。



モグラノテ

(山田 浩二)

■館長コーナー

冬3.

それって本当?

「かもって?」といわれますと直感的に何を連想されるでしょうか。私などは常識的に鳥の鴨がうかんできます。しかし、最近の世情に頻繁と登場してくるようになり、人を騙したり騙されたりしている環境におられる方はやはり「カモ」でしょう。ところで、なぜ騙されやすい人のことを「カモ」といわれるのでしょうか。広辞苑などを参考にして解釈しますと、どうやら「鴨はおいしい」、「料理は特に難しいテクニックを必要としないでもおいしくなる」だから「料理しやすい人」、「くみしやすい相手、利用しやすい好人物」となったようです。また、「鴨がネギをしょってくる」(鴨ネギ)という諺は鴨鍋にネギを入れると鴨とネギが相乗的な働きをしておいしくなることから、「ますますおあつらえ向き」という意味のようであります。

20 数年前、私は本市の出先機関に勤務しておりました。その施設のそばにかなり大きな池がありました。その池の堤防はあまり手入れされてなかったのが草や木で林のようになっていました。私は海や山など大好きで休みのときは時々そのあたりに行っただけでぼうっとしておりました。絶好のスポットが職場の側に出来たので昼の休憩時間にその池に行きました。冬のあるとき、鴨のような鳥が 25、6 羽池の周りを群れて飛んでいました。そのうちの一只が高さ 4 メートルほどの木に止まりました。もう 1



ヒドリガモ

度群れは旋回して今度は次の一只が先に降りた鴨から 20 メートルほど離れた草のない堤防に降りました。そして、群れはもう 1 度旋回し今度も 1 羽が降りてきました。2 羽目が降りた反対の池の際に着地したのです。もう 1 回の旋回の後、残った 20 数羽がいっせいに池の中央に降り立ったのです。まるで先に降りた 3 羽が見張り隊のようです。

観察の時間帯は昼食の休憩時間でしたから、その鳥たちは毎日そんな行動をしていたかどうかはわかりません。その冬、後 3 回そんな場面に直面しました。計 4 回の観察から、水鳥がどうしても木の枝に止まるのだらうという疑問が出てきました。それは、その木をよく見ますと、天辺は枝と枝が重なって平らになっていたから止まるこ



とができたのだと解釈できました。次に 4 回とも最初の 3 羽が同じ行動をしました。これは安全確保の隊形とも見ることが出来ます。鳥がこのような立体的な隊形を組み仲間を見守っていたとしたらこれはすごい出来事です。また、どのときも最初の 3 羽はその場でじっとしておりました。池の中では仲間が餌をつついたり羽根を撫で付けたりあるいは会話を楽しんだり(?)しているのに監視を続けているのでした。私の観察は短時間ですからそれから違う仲間と交代したかも知れません。毎日違うメンバーがその 3 役を演じていたかどうかわかりません。同じ鳥がそんな行動をしているか、違う鳥がしているのか鳥の顔など判別できない私にはわかるはずはありません。



20 数年過ぎた今、冬になりますとこのことが思い出されます。その鳥はカモ科であったと思うのですが、種名までは特定できません。その出来事だけがしっかりと焼きついているのです。今世間では子ども(だけではなく、すべての人)の安心・安全確保が叫ばれています。この鳥たちは私が見たときだけ見守り隊を結成しただけかも知れないし、何万年も繰り返してきたかも知

れません。もし、後者だとすればすごい話です。なかなかどうして「カモ」にはなりません。

(川村 甚吉)

■投稿

ウチダザリガニを捕まえる

2007 年 10 月 19 日、学校の授業は 17 時 50 分まであり、終わってから用意して福島に出発したのは 19 時半ごろでした。東京から福島まで約 300km。その道のりを雨の中、原付で走りました。翌日 14 時ごろに目的地の福島県小野川湖に到着しました。標高は 790m、福島県のほぼ最北端、昼でも気温は 10 度ありませんでした。このような寒い気候の中に 1930 年ごろ日本にアメリカオレゴン州より持ち込まれたウチダザリガニ(シグナルクレイフィッシュ)がたくさんいるらしいのです。このザリガニは大きいものは 25cm にもなり(巨大化した 1 m 近い個体の目撃情報もあります)、食用になるようです。



福島県小野川湖

早速、小野川湖に注ぐ小さな川を見つけたので、散策してみることにしました。流れがないところの流木の木の下にザリガニの足らしきものが見えたので、流木をひっくり返して捕まえてみると、まさにウチダザリガニでした。すごく大きいです。とにかくはさみがすごく大きいです。アメリカザリガニの大きい個体ですら子供に見えそうなくらいです。その後、小野川湖で採集を続け、蟹カゴも用いて合計 93 匹のウチダザリガニを捕まえました。一番大きいものは 23cm でした。夜は気温が氷点下近くまで下がりテントで寝ていた僕たちは、大変なおもいをしました。翌日朝、温泉に入り東京に帰りました。



採集したウチダザリガニ (♂)

捕まえたウチダザリガニはクラスの友達 5 人と鍋パーティーをして食べました。5 匹ほど丸々鍋に入れて出汁をとり、あとは^{はさみ}鉋と尻尾の剥き身、野菜を入れて食べました。こうするとかなりいい出汁がでて、ザリガニの味もかなりよかったです。みんなも、尻尾はフグの食感で鉋はカニそのものだという感想でとても好評でした。

現在ウチダザリガニは、外来生物法で特

定外来生物に指定され放流や生きた個体の運搬が禁止されていますが、北海道ではどんどん繁殖地を広げ、日本固有種のニホンザリガニやマリモに大きな被害を与えています。また、日本全国に広まったブラックバスも多くの在来の魚を食い荒らしています。もう広まってしまったものを駆除するのはなかなか難しいですが、人為的に広めないことは、可能です。外来種の放流、リリース等はしないようにしましょう。

(東京大学理科Ⅱ類 1 回生 寺田 拓真)

■寄贈標本の紹介

以下の方々より標本を寄贈していただきました。お礼申し上げます。

(※2007 年 12 月分まで)

<鳥類>

◆食野俊男さんより

ヤマシギ 羽根 1 点

貝塚市二色 2007 年 10 月 11 日採集

◆石井葉子さんより

バン幼鳥 死体 1 点

貝塚市橋本 2007 年 10 月 17 日採集

◆泉幸雄さんより

キジ 剥製 1 点

採集場所・採集日不明

<爬虫類>

◆江本大地さんより

シマヘビ幼蛇 死体 1 点

貝塚市馬場 2007 年 11 月 23 日採集

<魚類>

◆食野俊男さんより

アイゴ 生体 5点

貝塚市二色 2007年10月10日採集

◆河野通浩さんより

シマドジョウ 生体 4点

阪南市井関川 2007年12月1日採集

<甲殻類>

◆寺田拓真さんより

ウチダザリガニ 液侵標本 3点

福島県小野川湖 2007年10月21日採集

<昆虫>

◆五藤武史さんより

オニクワガタ♂ 成虫 1点

貝塚市蓄原 2007年8月28日採集

ヒナカマキリ♀ 成虫 1点

貝塚市蓄原 2007年10月2日採集

キイトトンボ♂ 成虫 1点

貝塚市千石荘 2007年10月11日採集

ウスイロアシブトケバエ 成虫 2点

貝塚市蓄原 2007年12月7日採集

◆桂孝次郎さんより

ウスモンナギサズ 成虫 2点

貝塚市二色 2007年9月17日採集

(採集者：逸見茂樹さん)

ウスモンナギサズ 成虫 2点

貝塚市二色 2007年10月7日採集

(採集者：逸見茂樹さん)

◆江本大地・玲子さんより

クリオオアブラムシ 成虫・幼虫多数

泉南市新家 2007年10月21日採集

◆食野俊男さんより

アカエグリバ 成虫 1点

貝塚市二色 2007年10月29日採集

◆松田勲・前田誠一郎さんより

タイリクアカネ 成虫 1点

貝塚市二色 2007年11月10日採集

◆青柳正人さんより

ミスジミバエ 成虫 1点

貝塚市稲谷 2007年11月22日採集

◆江本大地さんより

ヒメツチハンミョウ 成虫 1点

貝塚市馬場 2007年11月23日採集

◆濱谷巖さんより

クロコノマチョウ 成虫 1点

岸和田市別所町 2007年11月25日採集

◆喜多悠香・江本大地さんより

クビキリギス 成虫 2点

ハラビロカマキリ 成虫 1点

貝塚市二色 2007年12月8日採集

■遊学館スタッフ日誌

11月23日、馬場にある農業庭園たわわの小池の近くで、センブリを2株見つけました。センブリは「苦い」お腹の民間薬として知られています。りんどう科の植物で、秋に白い花をつけます。とてもカワイイ花で、久しぶりの出会いにうれしくなりました。♪♪(湯)

12月3日、「阪南市下荘の海岸でスナメリ死体の打ち上げがありましたけど、そちらで標本引き取りますか？」と水産技術センターの方より電話を頂きました。ありがたい連絡でしたが、現在、当館では近木川河口で打ちあがったスナメリの骨格標本作りの最中で、さらにもう一体を抱える余裕

はありませんでした。写真撮影のみ行い、貴重な泉州でのスナメリクジラの標本は、代わって大阪市立自然史博物館へ引き取られました。(山)

■おしらせ

特別展「近木川の四季」開催中

場所：自然遊学館多目的室

期間：2月3日（月）まで

貝塚市の中心を流れる近木川周辺の季節の移ろいや、子どもたちが遊ぶ様子を写真で紹介いたします。また、貝塚市の自然環境の変化について、パネル等で説明します。地域の人たちによって守られてきた貝塚市の豊かな自然（の成り立ち）を見つめ直し、温暖化をはじめとする自然環境の変化にどう対応していくのかを考える契機になれば幸いです。市民の皆さまのご意見をお待ちしています。



近木川の冬

特別展

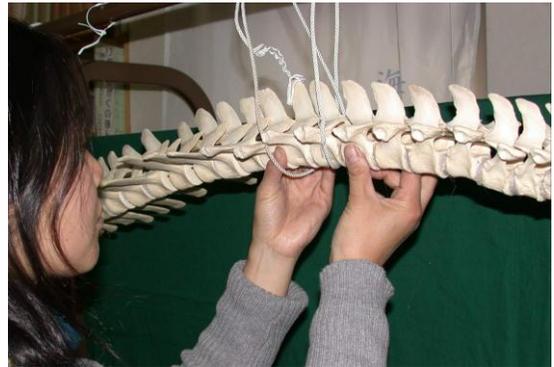
「スナメリたちのすむ海・大阪湾」

場所：自然遊学館多目的室

期間：3月1日（土）～30日（日）まで

（大阪湾スナメリネットワークの巡回展）

大阪湾にスナメリ（クジラ）がすんでいるのを知っていますか？昨年、近木川河口に打ち上げられたスナメリの骨格標本や原寸大模型などを中心に、スナメリと大阪湾について紹介します。



スナメリ骨格標本の作成中！

自然遊学館だより 2008 冬号 (No. 46)

貝塚市立自然遊学館

〒597-0091

大阪府貝塚市二色3丁目26-1

Tel. 072 (431) 8457

Fax. 072 (431) 8458

E-mail: shizen@city.kaizuka.lg.jp

<http://www.city.kaizuka.lg.jp/shizen/index.htm>

発行日 2008. 1. 16

この小冊子は庁内印刷で作成しています。